

豊かな河北潟に・夢のある干拓地に

河北潟は水に浮かんでいた
人も水のふところに生きていた
その水に戦いを挑み、僕らは土地を手に入れた
いま、潟は乾きに苦しんでいるように見える
僕らも渇きの中に立っている
風にはもう水の匂いがしない
砂ぼこりをまき散らし目と心を痛めつける
河北潟の乾きをいやす時が来ている
もう一度水の世界を呼びもどそう
古い水ではなく、新しい水のうるおいを
心がひからびてしまう前に

河北潟将来構想

- 多様な水辺の再生・農業と野生生物の共生 -

河北潟を代表する野生生物



チュウヒ

(中川富男氏撮影)

河北潟の一部が干陸化し始めたのは1970年です。チュウヒは潟の中に降りてゆく場所を見出しました。1974年には繁殖が初めて確認されます。乾燥化と水辺、ヨシ原と草地、チュウヒは両方を必要としています。河北潟の自然バランスの中心で揺れている鳥、それがチュウヒなのです。冬になるとノスリがやってきます。春、秋にはシギたちの渡りに出会えます。夏にはオオヨシキリの声で賑わいます。チュウヒは表情を変える季節の中を飛んでゆきます。その先に未来のヨシ原は広がっているのでしょうか。

河北潟将来構想

- 多様な水辺の再生・農業と野生生物の共生 -

この将来構想は河北潟に残された自然と野生生物を守りながら干拓地農業の発展を考えるためのたたき台になることを願って作成したものです。

作成にあたり以下の方々のご協力をいただきました。(敬称略)

アドバイザー：大串龍一 定塚謙二 中川富男

写真提供：矢田新平 中川富男

資料提供：清水武彦 松田正男 竹内正勝

発行 特定非営利活動法人河北潟湖沼研究所
生物委員会(発行責任者 高橋 久)
石川県金沢市二口町八58

TEL(076)261-6951 FAX(076)265-3435

1999年10月発行

制作 川原奈苗 三浦淳男 平松新一 白井伸和
永坂正夫 石原一彦 西原昇吾 高橋 久
挿絵 藤原直子



アサザ

開花の瞬間を見届けようと、ふくらんだ一つのつぼみの前でじっと待っていたのに、ほんの少しよそ見をしていたら、もう半開きになってしまいました。いつの間にかあちらにもこちらにも、さっきまでのつぼみが、もう開いています。見渡す限りの水面に黄色の宝石をちりばめた場所が、かつてあったかどうか、私たちはすでに知りません。ありふれていたはずの風景が、そうでなくなったことに気付くのは、それをずっと見守ってきた人だけ。世が移り、世代も変われば、それが失われた過去があったことさえも誰も知らない時代がくるでしょう。潟の片隅の小さな場所で、はかない命の一日花の、たった一日だけの朝が今日もはじまります。

オオヨシキリ

オオヨシキリは河北潟の夏なのです。今年4月29日に、去年は5月6日に初鳴きを聴きました。その日から河北潟の夏は始まったのです。夏の中にわきかえるオオヨシキリの声こそ、潟が力強く生きていることを僕らに教えてくれるのです。



(矢田新平氏撮影)

pro natura NACS-J
Foundation-Japan

このパンフレットは1998年度のPRO NATURAファンドによる助成金によって作成されました